

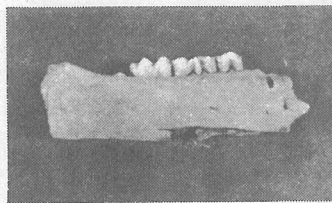
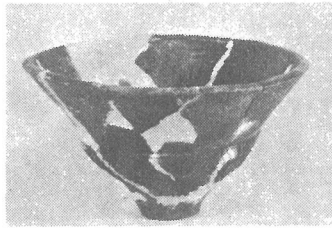
町史シリーズ①

貝塚文化 —縄文人の食生活—

「横芝町史」の編集事業も、町民各位のご協力を得まして、いよいよ九月上旬発行の運びとなりました。そこで編集室では、町史の「みどころ」となる「古代のふるさと」について、三回の連載でそのダイジェスト版を計画してみました。

—郷土の縄文遺跡—

下総台地を刻む栗山川溪谷は、谷内の標高も著しく低く、五M等高線は遠く多古町北方にまで遡り、原始時代には海水の浸入をみて複雑な海岸線をもった奥深い海湾であったと考えられています。洪積台地の周辺にひろがる遠浅で波静かな入江の海は、貝と魚の宝庫でした。そのような海の幸を意欲的に利用し、土器をはじめとする道具や生活技術を創造して、縄文文化がおこったのです。



姥山貝塚の出土品
(上—姥山Ⅱ式土器
下—獣骨(イノシシ))

当時の海湾の汀線にそって「貝塚」など縄文遺跡が分布するわけですが、昭和四八年度の調査(註1)によると横芝地方の縄文遺跡は四二か所(貝塚一一・遺物出土地五・散布地二二・包含層四)を数え、県下でも有数の遺跡地帯を形成しています。この遺跡群は早くから注目され、青木謹爾・鈴木正隆・鋸田欣治・清水浦次郎など諸氏が調査をすすめ、昭和三〇年以降、清水潤三・鈴木公雄両氏を中心とする慶応義塾大学の学術調

査が実施され、ひろく学界に報告(註2)されました。代表的なものとしては次の四遺跡があげられます(付図参照)

1、木戸台貝塚(中・後期)

2、牛熊貝塚(後期)

3、鴻ノ巣貝塚(中・後期)

4、姥山貝塚(中・後・晩期)

いずれも五〇〇〇〜三〇〇〇年前の縄文遺跡ですが、殊に姥山貝塚からの出土品は質量ともに豊富で、現在、鈴木公雄氏によって晚期縄文土器の比較研究がすすめられつつあります。今後の地域研究の中で、さらに新しい遺跡の発見が期待されています。

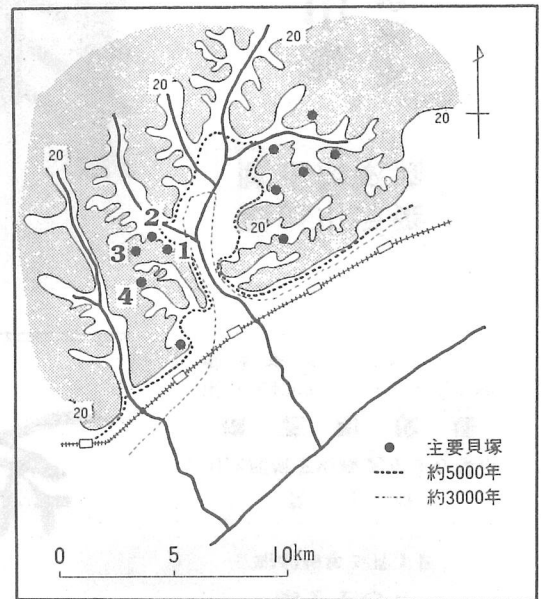
—縄文人の食糧—

波静かな入江の海と、台地をおおう照葉樹林の発達は、そこに住む縄文人たちの漁撈・狩猟活動に豊かな獲物を提供してきました。貝塚は共同体(集落)の「ごみ捨て場」の跡であり、多くは食用にした貝殻の積ったものです。そこを発掘することで、当時の食料について知ることができます。今までの調査成果を整理してみると、横芝地方の縄文人は次のような食糧を採取して生活していたようです。

①貝類…チョウセンハマグリ・ハマグリ・シジミ・ダンペイキシヤゴ・アサリ・カキ・マツカサガイ

②魚類…クロガイ・タイ・スズキ
③獣類…イノシシ・シカ・サル・タヌキ・イヌ・ウサギ・アナグマ

牛熊・姥山など加曾利B式の遺跡は獣骨を大量に出土し、魚類はクロガイ・スズキが圧倒的に多く、その漁撈は栗山川溪谷内において行われ、外洋へ進出することはなかったと考えられます。貝塚からの出土物をみると縄文人の食料は「動物食」であったと思われるが、やはり主体はドングリ・トチ・クルミなどの「植物食」であったといわれ、各地の遺跡で堅果類・パン状炭化物など植物の遺存体が発見されています。



栗山川溪谷の主要貝塚と当時の海岸線

—充実した原始・古代篇—

「町史」の原始・古代篇は、考古学者の川戸彰先生が執筆されましたが、慶大研究室のご好意で貝塚資料が全面的に公開され、今までにない充実した内容になるものと期待されています。また清水教授の「古代文化」に関する特別寄稿もあり、古代のふるさとと復元が、「町史」の大きな「みどころ」となりそうですので、ご期待下さい。

(註)

- ①「横芝町文化財総合調査報告1」(昭和48文化財紀要)
 - ②清水潤三「千葉県栗山川溪谷における貝塚の地域的研究」(史学三二の一) 貝塚の地域研究
 - ③鈴木公雄「姥山Ⅱ式土器に関する二三の問題」(史学三七の一) ほか
- (文責・町史編集室)